

Title	国富論の根本思想に就て
Sub Title	
Author	藤林, 敬三
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1927
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.21, No.3 (1927. 3) ,p.380(82)- 419(121)
JaLC DOI	10.14991/001.19270301-0082
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19270301-0082

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

國富論の根本思想に就て

藤 林 敬 三

國富論冒頭の緒言に従へば

『各國民の年々の勞働は、其の年々消費する一切の生活必需品並に便宜品を本來供給する所の根源であり、是等のものは常に其の勞働の直接の生産物より成るか、或は其の生産物を以て他國民より購入せらるゝものより成るか孰れかである。』

夫故に、此の生産物又は其れを以て購入せらるゝものが、是れを消費すべき人口數に對する割合の大小如何に従つて、其の國民が其の必要とする一切の必需品並に便宜品を充分供給せられてゐるか否かが岐れるであらう。

乍然、此の割合は當然各國民に於て、二つの異なる事情に依つて加減せられる。即ち、一つは各國民の勞働の一般適用上の熟練、堪能並に判斷に依り、他は有用勞働に従事する者の數と其の然らざる者の數との割合に依る。……其の年々の供給の豊富なると僅少なるとは……是等兩事情に依る。

『勞働生産力の此の増進の諸原因と、勞働の生産物が社會の諸階級並に様々の境遇の人々の間に自然に分配せらるゝ順序とは、本研究第一篇の主題をなす。』

『有用生産的勞働者數は……何處に於ても、彼等を働かすに用ひらるゝ資本量と、其の用ひらるゝ特殊の方法とに比例する。故に、第二篇は資本の本質、資本が漸次蓄積せらるゝ態様及び資本の用ひらるゝ方法の異なるに従つて、其の動かす勞働量の異なることを論ずる。』

勞働の適用上、熟練、堪能並に判斷に就て可成よく進歩せる諸國民は、勞働を一般に管理し又は指導するに當つて甚だ異なる方策を採り來つてゐる。然かも是等の方策は總て、勞働の生産物を等しく容易に大ならしめたのではない。……斯くの如き政策を採用し確立したるの觀ある諸事情を第三篇に於て説明する。』

恐らく、是等の諸方策は、初め特殊階級の人々の私利心と僻見とに依つて採用せられ、社會の一般幸福に及ぼす其等の結果が、考慮せられ、若しくは豫見せらるゝことなかりしと雖も、然かも其の諸方策は經濟學上甚だ異なる諸學説を生むに至つた。……是等の學説は實に識者の意見に對してのみならず、又王侯並に君主國の行政上に著大なる影響を與へてゐる。予は第四篇に於て能ふ限り充分に且つ明瞭に、是等の諸學説と、其れが、様々の時代並に諸國民に於て生ぜしめたる主要の結果とを、努めて説明せんとした。

大多數の人民の所得は何より成りしか、或は様々の時代並に諸國民に於て、彼等が年々の消費に供給したる根源の本質は如何なるものなりしか、是れを説明するは以上最初の四篇の目的である。最終の第五篇は、君主又は國家の收入を論ずる。此の篇に於て予が明示せんと努めたる所は、次ぎ

の如くである。即ち、第一は君主又は國家の必要なる經費とは何であるか。是等の經費中、其の何れが社會全體の一般的貢獻に依つて、又其の何れが、社會の單なるある特殊の部分、若しくはある特殊成員の貢獻に依つて、當に支辨せらるべきか。云々¹⁾

アダム・スミスは右の緒言に於て、國富論全篇に渡つて其の内容を簡單に明示し、讀者をして開卷先づ彼の計畫、構想を端的に知らしめんとすの意圖に出で、右の緒言を讀む者は何人も、唯だ彼が第五篇に關して述ぶる所を除けば、茲に窺ひ得る彼の態度が、一事の當さに爲すべく、或は當さに爲すべからざることを主張する者の態度にあらずして、可否の論斷を離れて、單に事實を事實として説明せんとする理論家の態度²⁾であることに一應留意するであらう。乍然、國富論全卷を通じて是れを見れば、彼の態度は必ずしも是れと一致せずして、What is の見地と What ought to be の見地とが並び存してゐる。是等の點に關して Hasbach は Political Economy なる語が、國富論にあつて三様の意義に、即ち、第一は經濟政策體系、第二は實踐的科學、而して第三には理論的科學を意味すと解せらるべき箇處の存することを指摘し、然る後更に國富論全卷脱稿の後に草せられたりと推測せらるべき右の緒言に於て、スミスが大體理論家の態度を表明せるものであると做し、³⁾スミスにあつては、Political Economy とは國富の諸原因並に本質に關する理論的科學なりと云ふ見解が漸次強く現はれてゐる⁴⁾と解してゐる。乍然、尙ほ吾人は、國富論に於てスミスの主として目途せる所が、理論經濟學の展開に存せずして、唯だ國民を富裕、繁榮に導くべき一國經濟策の據るべき所を明かならしめんとするに存し、而して彼は斯くの如き意圖より些も脱却することなかりしものであると解するを以て彼の眞意に庶きものなることを信ずる。國富論が夥多の經濟理論を包有し、之れを補ふに古來東西に渡る適當の歴史的記述を以てし、而して又數多の經驗法則を包有してゐることは、如何に慎重に彼をして富國策の根底を築くに至らしめたるかを窺はしむるに足る。蓋し、國富論を以て單純なる一片の時務政論に非ずして、規模宏大なる富國策の系統的樹立であり、現實を等閑に附せざる經綸の披瀝であるを見るに於ては、素より其の政策的見解を支持すべき理論的研究の存すべきは其の處である。されば斯く解して再び右の緒言を見れば、其處にスミスが、政策的見地を固持し、而して此の故に先づ理論的研究の必要なるを認めたるの意の存すること必ずしも推測に難からざる所である。吾人は、唯だスミスが、彼自ら國富策の樹立を思ふものなることを其處に述べべくして述べざりしに過ぎずと推測する⁵⁾かくて、其の大部分が後に國富論に發展したりと見做さるゝ、グラスゴー大學に於て彼の爲したる法學講義中、其の第二部警察論の主要項目たる經濟政策に於て、彼は専ら『低廉若しくは豊富、或は是れと同一事である、富と豊饒とを得る最も適當なる方法』を考察せんとし、而して『是等の便益を取得する最も適當なる方法を確知するが爲めには、先づ富裕の何たるを明かにすることが必要であらう。』⁶⁾との意を傳へてゐる。此は正に國富論冒頭の緒言と合せて、スミスが専ら經濟政策の確立を意圖せるものなりと解すべきである。右の緒言に至つて、彼の興味が經濟政策を離れて漸く理論經濟學に移らんとする形迹を示すものではない。國富論を以て慎重なる經濟政策的見解の發展であると見るに誤なしとすれば、スミスの斯くの如き見解の根底を流れる根本思想は如何なるものであるか。彼の究極信じて疑はざりし根本思想は何

であるか。而して彼が、其の富國策と共に其の根本思想を如何に發展せしめたるか。是れ本論に於て吾人の究明せんとする所である。

(1) Adam Smith, *The Wealth of Nations*, ed. Cannan, Vol. I, p. 1 ff.

(2) 小泉教授、アダム・スミスの理論經濟學概論(三田學會雜誌、第十七卷、第七號、一一〇頁)

(3) W. Hasbach, *Untersuchungen über A. Smith*, 1891, S. 218, 220, 221.

小泉教授は前掲論文に於て Hasbach に同じて次の如く述べてゐる。

「たゞ國富論緒言は全卷脱稿の後に草せられしものならんとの推測を念頭に置き、而して國富論が、始め僅かに警察論の重要項目たるに過ぎざりしもの發展大成したるものなるを思ふときは Smith の興味の重心が、一個の經濟政策學としての *political economy* より漸く理論經濟學としての *political economy* に移動し來れるの形迹あるは之を認むるべきを得べし」(一一二—一二三頁)

(4) 然らばスミスが、何故に其れを記せざりしもの疑問に對しては、吾人は、スミスは必ずしも自明の事なりを考ふることは一々之れを記するの慎重なる態度に出でざりしものである。答へ得るが如くである。スミスの斯くの如き態度に關しては次の書を參考せられ度し。

R. Zeyss, *Adam Smith und Eigennutz*, 1889, S. 90-91.

(5) *Lectures of Adam Smith*, Ed. Cannan, 1896, p. 157.

二

國富論に先だつ二箇の經濟學說、即ち Mercantilist の Physiocrat との兩者の學說に對する批評に充てられたる、國富論第四篇の緒言に於て、スミスは、

『政治家又は立法者の學の一部門なりを考へらるゝ經濟學 *political economy* は異れる二目的を志すものである。即ち、第一は人民の爲めに豊富なる所得、或は生活資料を給すること、更に正しく言へば、國民をして能く自ら斯くの如き所得、或は生活資料を給せしむること、而して第二は國家に……其の公務の爲めに充分なる収入を供給することは是れである。其は國民をも君主をも富まさんと欲するものである。』と述べ、又別の箇處に於て、

『各國の富と、而して力が富に依存する限り、各國の國力とは、當然、常に總て租税が、究極それより支拂はるべき源たる、其の年々の生産物の價值に比例すべきものである。乍然、各國の *political economy* の大目的はその國の富と國力とを増進せしむるにある』と謂ふ。

是れを以て觀れば、スミスの富國策は究極國民の富を増進せしめんことを企圖せるものである。然らば富とは何ぞや。スミスに従へば「土地及び労働の年々の生産物」が、即ち「社會の眞の富」をなす。而して各國民が「年々消費する一切の生活必需品並に便宜品」は、各國民の年々の労働に依つて供給せられ、且つ「是等のものは常に其の労働の直接の生産物より成るか、或は其の生産物を以て他國民より購入せらるゝものより成るか孰れかである。」「(既出)又別に彼は、國民「各自の貧富は、其の生活必需品、便宜品並に娛樂品を享有し得る程度如何に應ずる」と謂ふ。スミスにあつては富とは、國民の労働に依つて年々供給せらるゝ所の、國民の年々消費する生産必需品、便宜品並に娛樂品、即ち一般に人の生活上消費せらるゝ有形財より成る。さればスミスの富國策は國民生活上必要なる、便宜なる而して娛樂となる消費財の増進を目的とするものである。而して人の生活上消費

の充實は經濟生活の繁榮を意味し、更に幸福なる生活を意味するのとするれば、又彼の富國策は國民の繁榮幸福を企圖するものであると云ひ得る。洵に右の如く解せられたる富の概念は、スミスが經濟觀察の出發點を爲すものである。彼が、富を以て貨幣若しくは金銀より成ると云ふ觀念を目して、Mercantilism の誤謬なることを言へるは既に周知の事實に屬する。又彼が Mercantilist の政策の誤れるを批評せる一節に於て、『消費は一切生産の唯一の目的であり、而して生産者の利益は、唯だ其れが、消費者の利益を助長するに必要なる限りに於てのみ、留意せらるべきものである。此の準則たるや全然自明のことたるが故に、是れを證せんと試みることは無稽である』、『一切の商工業の終極の目的』は消費にある。』と謂へるは彼の富國策の一面を能く表はせるものである。

然らば一國民の貧富は何に依つて是れを知り得るか。既述國富論冒頭の緒言に従へば、國民の貧富は其の人口數に對する富の割合、換言すれば國民成員平均の富の程度に依つて計量せられる。然らば一步を進めて、一國、一社會の成員間に於ける如何なる富の分配状態を以て望ましとなすか。即ち、一國の多數者が比較的富裕なる状態にあるを以て可とするか。或は大多數者の貧困なるにも拘らず、少數者に巨大なる富の壟斷せられて居る状態を以て望むべしとするか。更に事實富の平等なる分配を欲するか。スミスの右の標準は是等の問題を解決するには不十分である。彼の見解は果して孰れに存したるか。吾人は幸にして國富論中左の如き記述を發見する。其處では、彼は社會の下層階級民の境遇改善が其の社會にとつて利益と見做すべきや否やの問題に答へて、

『解答は一見甚だしく明瞭なりと考へらる。各種の僕婢、労働者並に職人は各大政治社會の最も大なる部分を構成してゐる。而して此の大部分の境遇を改善するものは、決して全體に對して不利益なりと見做され得ない。如何なる社會も其の所屬員の最も大なる部分が貧困悲慘の状態にあるは、確かに繁榮幸福ではあり得ない』』と。

是れを以て觀れば、スミスは社會の大部分を構成する賃銀獲得階級の比較的富裕なる状態を以て、短言すれば高き賃銀を以て社會の繁榮幸福を思はんとするものである。乍然、彼は必ずしも富の平等なる分配を欲したのではなく、更に社會諸階級の富の大小、貧富懸隔の問題を殆んど考慮してゐない。洵に彼は Physiocrat より分配論に關する重要な影響を蒙れるにも拘らず、國富論は本來一國生産物の全體が、如何なる割合に於て諸階級間に分配せらるゝかを考究せず、其の割合の大小を決定せんとする分配論を有せず、後來の理論經濟學者が、屢々其の不十分なるを歎ずるが如く、彼の分配論は僅かに價格論の一部を成すに過ぎない。』されば其の富國策に於て分配問題の考慮が不十分なるは素より當然のことである。

かくて、スミスの富國策は先づ富の生産増進を企圖し、分配問題を左程重要視しては居ない。

(1) W. of N. Vol. I. p. 395.

(2) Ibid. p. 351.

(3) スミスの云ふ一國の貧富は Cannan の指摘するが如く、其の國の住民の貧富は同一事ではなく、其の國の土地の面積に對する或は又土地の面積並に其の人口數に對する富の量の割合に依つて決定せられると解すべきである。(Cannan, Theories of Production and Distribution, 3rd. Ed. 1920, p. 12.) 乍然、富は人に對して富であり、又富は社會の何人かに依つて所有せらるゝが故に土地の面積に相對的に一國の貧富を決することは、再び富を人口に對する比例に還元するか、然らざれば

は無意義である。幸にスミスが、一國の富と國民の富とを混同することなしと雖も、尙ほ彼が、一國の富と云ふも事實其の國民中何人かの所有する所なりとすれば、彼の富國策は歸して究極國民の富の増進を自途するものである。

- (4) W. of N. Vol. I. p. 4.
- (5) Ibid. p. 32.
- (6) スミスの富の概念を専ら消費財に解することに就ては次ぎの論文を参照せられ度し、
小泉教授、前掲論文、一一三—一一四頁、
竹内謙二譯、國富論、一、一二四—一二五頁、一二九—一三〇頁。
- (7) スミスは必ずしも物質的生活の充實を以て獨り人生の幸福なりと做したるに非ざるときは、其の道徳情操論中の次ぎの句を以ても知り得る。Happiness consists in tranquillity and enjoyment. (Adam Smith, The Theory of Moral Sentiments, Bohn's Library, 1911, p. 209)
尙ほスミスは後に引用するが如く、「身體の安易、心の平和に於ては……大道の側に日向曝しをしてゐる乞食は、國王が、是れを得んき争ふ所の安全を所有してゐる」と述べてゐる。
更にスミスに於ては富其のものは人間生活の目的ではなくして、手段である。(河合榮治郎、社會思想史研究 第一卷、一一—一三頁、參考)
- (8) W. of N. Vol. I. p. 396. 404. 415. Vol. II. p. 57.
- (9) Vol. II. p. 159.
- (10) Vol. I. p. 80.
- (11) Cannan, Theories, pp. 185 ff. pp. 230-231.
小泉教授、前掲論文、一二八頁、以後、參考

三

スミスが先づ其の富國策に於て企圖したる國富の生産増大に應ずべき經濟理論は如何なるものであるか。暫く政策的見地を離れて是等の問題を窺ふことが必要である。而して此は國富論全卷の緒言に明かなるが如く、専ら第一篇の前半と第二篇との主題をなしてゐる。

既に述べたるが如く、富が國民の勞働に依つて供給せらるゝが故に、國富の大小は二つの異なる事情に依つて左右せられる。即ち、勞働生産力の大小と國民中富の生産に従事するものの占むる割合、スミスの言葉に従へば「一つは各國民の勞働の一般適用上の熟練、堪能並に判斷に依つて、他は有用勞働に従事する者の數と其の然らざる者の數との割合に依つて」左右せられる。(既出)然かもスミスに依れば文明國に於ては右の二事情の内主として勞働生産力の増大が富の増進の因由である。而して勞働生産力増大の原因は一つに分業の事實に依るに外ならない。乍然、勞働生産力の程度を一定なりとすれば、國富の大小は有用勞働者數の大小に依つて左右せられる。而して『有用生産的勞働者の數は……何處に於ても、彼等を働かすに用ひらるゝ資本量と其の用ひらるゝ特殊の方法とに比例する』。(既出)

國富論第一篇は勞働生産力増大の原因としての、有名なる分業論を以て始まる。而して分業に依る勞働生産力の増進は結局三種の事情に、即ち『第一は各特種勞働者の堪能、第二は一種の仕事より他種の仕事へ移る場合に普通失はれる時間の節約、而して最後に勞働を容易簡略ならしめ、以て一人をして能く多數人の仕事を爲さしめ得る多數の機械の發明に』歸せられる。(乍然、分業の行はる

、程度は交換の程度、市場の廣狹に依つて制限せられる。蓋し各人の富の餘剰が他人の勞働所産中、自己の要求する部分と交換せらるゝ機會が制限せられてゐる場合には何人も進んで一職業に専念没頭するを得ないが故である。⁽²⁾

第二篇に於てスミスは國富の生産に従事する有用生産勞働者數を決定するものとして、資本の蓄積並に資本の諸用途に就て述べてゐる。『資本は吝嗇に依つて増加せられ、濫費と不行跡とに依つて減少せらる。人は其の所得より節約する所を自己の資本に加へ、而して自ら一層多くの生産的勞働者を維持する爲めに投下するか、又は利子を得んが爲めに此れを貸付け他人をして斯く爲さしむ。かくて吝嗇は生産的勞働者の維持に充てらるる基金を増大し、生産的勞働者數を増加する傾きを有つ。夫故に吝嗇は一國の土地及び勞働の年々の生産物の交換價値を増す傾きがあり、年々の生産物に追加價値を與へる産業勞働の量を増す。⁽³⁾一國民の土地及び年々の生産物の價値を増加し得るは、唯だ生産的勞働者の數を増すか、或は以前より雇傭し來れる勞働者の生産力を増すかの外に手段はない。其の生産的勞働者の數を増し得んが爲めには、單に資本即ち彼等の維持に充てらるる基金を増加すべきのみであり、又同數の生産的勞働者の生産力を増加し得んが爲めには、機械要具を増加し是れを改良するか、或は適切なる分業、仕事の分配を行ふか、其の孰れかに依るの外道なし。而して其の何れの場合にも追加資本は殆んど常に必要である。⁽⁴⁾かくてスミスは又別の箇處に於て生産と消費の平衡を論じ、消費する所生産する所に超ゆるか、然らざるかに従つて各國民の衰亡と繁榮とが必然決せらるゝことを述べて、再び節約に依る資本増大の重要を力説してゐる。⁽⁵⁾

斯く生産的勞働は資本に依つて維持せらるゝけれども、然かも等額の資本の動かし得る生産的勞働者數は其の投下せらるゝ産業の種類に依つて大いに異なる。又同様にして一國の土地及び勞働の年々の生産物に附加せらるゝ價値も亦異なる。スミスは資本の投下せらるゝ四種産業を認めて、是れを(一)農業、(二)鑛業、(三)漁業、(四)工業、(五)卸賣商業(運輸業)、(六)小賣商業とする。而して等額の資本が動かす生産的勞働者數は右の順序に従ひ、農業資本が他の三者に比して最も多數の生産的勞働者を働かし、且つ最も大なる價値を産出附加する。⁽⁶⁾而して若し一國の資本にして是等總ての産業を同時に營まんが爲めに不充分なる時には、先づ最も有利なる農業に投資し、順次商工業に及ぶを以て資本充實の最捷徑であり、⁽⁷⁾従つて又國富増進の最捷徑である。

生産増大に關する限りスミスが國策の理論的根據は凡そ右の如くである。

- (1) W. of N. Vol. I. p. 9.
- (2) Ibid. p. 19.
- (3) Ibid. p. 320.
- (4) Ibid. p. 325.
- (5) Ibid. p. 461.
- (6) Ibid. pp. 340-344.
- (7) Ibid. p. 346.

四

スミスの經濟學説は二重の認識の上に立つてゐる。今假りに國富論を其の研究方法の上から是れ

を觀れば、演繹法と歸納法とが其處に並存して居り、而して前者は『自然の假説』the Nature hypothesis に基く先驗的推論であり、後者は事實に基く經驗的推理である。更に前者は形而上學的目的論を後者は因果論を構成してゐる。然らば兩者は如何なる關係にあるか。スミスは彼の形而上學的思想の結果の眞なることを支持せんが爲めに、又其の正しきことを確證せんが爲めに、經驗的認識に訴へたるものなりと解すべきであらう。彼自身其の歸納的觀察中に尙ほよく『自然の假説』に基く結論の確證を、自然の法則の實證を得たりと信じてゐたのであらう。彼が究極信じて疑はざりし根本思想は形而上學的目的論にあり、而して國富論は幾多の經驗的觀察を包有するに拘らず、究極形而上學的基础の上に立つものである。

スミスの根本思想は自然神學並に自然法學說に由來にする。正に彼が道德情操論中に説く所に從へば、

『宇宙の總有る方面に於て、吾人は人々が生せしめんと企圖する目的に對して手段が最も精妙に調整せられてゐるのを觀、而して一植物、又は一動物體の機構中に、如何に一切のものが個體の保存と種の繁殖との自然の二大目的を進めんが爲めに工夫せられてゐるかを嘆賞する』。

『斯くして自己保存と種の繁殖とは、自然が一切の動物を造るに當つて志したる大目的であると思はれる。人類は是等の目的の欲求と其の反對の嫌惡とを賦與せられてゐる。……乍然、吾人は斯くして甚だ強烈なる是等の目的の欲求を賦與せられてゐるが、是等の目的を遂行する適當の方法を發見することは、吾人の理性の緩慢、不確實なる決定に委せられて來て居らず、自然は吾人を本來直

接の本能に依つて是等の目的に向はしめてゐる』。

『他の總有る理性ある動物の幸福も亦人類の幸福も、彼等を生存せしむるに當つて自然の創造者が本來意圖したる目的であつたと思はれる』。

人類を含む一切諸物の完成幸福は、素、創造者の意圖したる所であり、而して此の目的實現の爲めに人類は適當なる本能衝動を賦與せられてゐる。故に人が自然に依つて與へられたる所に從つて行動することは、本來神に因つて意圖せられたる幸福を實現するの道である。神の創造計畫中であつて諸物に與へられたる動力と、其の發展の法則並に秩序とは、スミスが『自然的』と稱する所のものであつて、此の『自然的』なるものを現實經驗の世界に認識せんとするは、即ち、彼の自然觀である。而して又『自然的』なるものは同時に善なるもの、正なるもの、有用なるものと同語義であるのと確信するは、十八世紀啓蒙哲學に共通なる思想であつて、彼も亦是等の觀念を混同し、而して神の意圖に對して有用なる萬物の完成幸福の結果を信賴した。斯くの如き信賴は彼の樂天觀として知らるゝ所のものである。然かも、此の自然觀と樂天觀とは常に相表裏し、相合して彼の形而上學的目的論の兩面を成してゐる。

然らば、經濟生活の範圍に於てスミスは其の根本思想を如何に發展せしめたるか。吾人は先づ、彼が國富論に於ける唯一の目的たりし富國策の理論的基礎——前節に述べたる彼の理論的考察——に關聯する其の自然觀の經緯を知ることが必要である。

スミスに從へば、

『各個人が自己の生活状態を改善せんとする自然的努力は、自由と安全とを以て之れを行ふことを許されてゐる場合には、甚だ有力なる原理であつて、獨り之れのみにて何等の助力なくとも、常に社會を富と繁榮に導き得るのみならず、又愚劣なる人爲の法律に依つて其の作用を余りに屢々妨げる所の僭越なる總有る妨害に打勝ち得るものである』。

スミスが茲に『各個人が自己の生活状態を改善せんとする自然的努力』と云ふは、各個人が自然に依つて與へられたる自利心の發動に従つて行動するの謂であつて、一切の經濟活動は各人の自利心の發動に基づくと觀られ、更に經濟社會の組織並に其の發達も亦本來神の意圖したる所であつて、何等かの人爲的方策に依つて完成せらるゝものではなく、寧ろ各人の自利追及の有利なる自然の結果であると考へられてゐる。かくて彼が文明社會に於ける富の驚くべき増進の原因なりと見做したる分業は、『素、其の來す一般の富裕を豫見し、且つ意圖する何等かの人智の結果ではなく、何等かの宏大なる利益を考量せざる人性のある性向、即ち一物を他物と取引し、交易し、交換せんとする性向の、甚だ緩漫に徐々ではあるが、必然的結果である』。而して交換は人間の自利心に依つて發展し、交換經濟の確立は更に分業を發展せしめる。即ち、彼は謂ふ。

『……人は殆んど絶えず其の仲間の助力を必要とする。然かも人は單に仲間の恩恵に依つてのみ之れを得んとするも徒勞である。寧ろ若し自己に有利に他人の自愛心に訴へ、且つ自己が他人に求むる所を、自己の爲めに他人が爲すは彼等自身の利益なることを、彼等に知らしめ得るならば、其の目的を達するに一層庶いであらう。何人も他人と何等かの賣買申込を爲すものは、此くならずと考へる。予の欲する所のものを予に與へよ。然らば予は汝の欲する此のものを與へん。とは總てかゝる申込の意味である。斯くの如くにして、吾人は其の必要とする世話の殆んど全部を互に受くるのである。吾人の食事は肉屋、酒屋又は麵麩屋の恩恵に俟つに非ずして、彼等が自らの利益を考へるが爲めである。吾人は彼等の慈悲心に訴ふるに非ずして、彼等の自愛心に訴へ、且つ斷じて彼等に對して吾人自らの必要を説かずして彼等の利益を説く』。

『かくて彼自らの勞働所産中自らの消費以上に出づる餘剰の全部を他人の勞働所産中自己の必要となすが如き部分と交換し得るの確實なることは、各人をして進んで特殊の職業に従事せしめ、且つ此の特種の業務に對して各人の有する技能、英才を總て練磨し完成せしめる』。

分業の起源は人間の交換性向に在り、交換は各人の自利心に依つて發展する。従つて『交換性向は自利心に刺激せられて分業を導き』發展せしむと云ふべきである。

スミスが資本を以て又國富増進の至要の原因なりと見做したることは既に述べたる所である。即ち資本は一つは生産的勞働者を維持し、他は勞働生産力を増大する。而して資本は國富の増進に伴つて吝嗇節約に依つて漸次蓄積せられる。かくて彼は節約家を以て總て社會の恩人であり、浪費者を以て總て社會の公敵であると做し、再び生産消費平衡論を説いた。然かも彼は資本の蓄積が、自利心の發動に依つて自然に増大するとの認識に達してゐる。其の論ずる所に從へば、

『浪費に就て之れを觀るに、人の失費を促す原理は現在の享樂に對する欲情であつて、此は時に極めて強烈にして、且つ是れを制すること甚だ困難なるも、一般には唯だ瞬間的にして、且つ偶發

的のものたるに過ぎず。乍然節約を促す原理は吾人の生活状態を改善せんとする欲求であつて、此の欲求は大體平靜落著たるものなれども、母胎内より吾々と共に來り死に至る迄決して吾々を去らざるものである。此の生死の二瞬間を分つ全時期に於て、何人も何等の變更又は改良を全然望まざる程完全に充分に自己の境遇に甘んずる一瞬間も恐らくはない。財産を増加することは、殆んど總ての人々が彼等の生活状態を改善せんことを希求する方法であり、此は最も普通にして最も明白なる方法である。而して彼等の財産を増加する最も適切なる方法は、正規に且つ年々に彼等が獲得するか、或はある異常の際に得る所のものの中ある部分を節約し蓄積するにある。されば失費の原理はある場合には殆んど總ての人々に在り、ある人々には殆んど總ての場合に在るも、然かも殆んど總ての人々にあつては、其の生涯の全體を平均せば、節約の原理は管に前者に優るのみならず、實に大いに優るものである。』更に政府の浪費不行跡は私人の其れに比して恐るべきものではあるが、『乍然、經驗上、此の節約善行は多くの場合管に個人の私の浪費と不行跡を償ふのみならず、又政府の公の浪費をも償ふに充分であると考へらる。自己の生活状態を改善せんとする各人の一様にして不變不斷なる努力は、私富も又國富も素由つて生ずる原理にして、屢々政府の浪費と且つ又行政上の最大の誤謬あるに拘らず、改善に至る事物の自然的進歩を充分維持する力がある。動物生命の未知の原理の如く、管に疾病のみならず、又醫師の不合理なる處方あるに拘らず、其は屢々組織の健康と氣力を恢復する。』^(四)

更に資本の用途に關するスミスの自然觀を窺へば、

『各個人は絶えず其の用ひ得る資本の何れに對して最も有利なる用途を見出さんと努力しつゝある。彼が考慮する所は實に彼自身の利益であつて社會の利益ではない。然かも彼自身の利益の考慮は、自然に或は寧ろ必然に、彼を導いて社會にとつて最も利益ある用途を擇ばしむ。』^(五)

而して資本投下の順序に關してスミスは謂ふ、
『彼自身の利潤の考慮はある資本の所有者をして之れを農業に投ずるか、製造業に投ずるか、或は卸賣商業に又は小賣商業のある特定部門に投ずるかを決せしむる唯一の動機である。其の資本が是等異なる方法中何れに投せらるゝかに依つて、其の資本の動かし得べき生産的労働の量に差違あり、而して其の資本が其の社會の土地及び労働の年々の生産物に附加し得べき價值に差異あることは決して彼の考慮に這入らぬ』^(六)。』乍然、各人の其の資本に對する考慮は自然に先づ農業を發達せしめ、次に都市の製造業に及び、然る後外國貿易の發達を促す。^(七)』夫故に事物自然の成行に従つて發達しつゝある各社會の資本の大部分は、先づ農業に、然る後製造業に、而して最後に外國貿易に向けられる』^(八)

即ち資本投下の自然的順序は、既に述べたる所と對比して、スミスにあつては國富増進の爲めに最も有利なる順序である。資本利潤の高低に應じて、各個人が自利心の命ずる所に従つて、自己の資本を自己に有利なる方面に投下し又は轉向するの結果は、自然に其の社會の生産的労働の最大量を維持し、社會にとつて最も有利とする所に一致する。人爲的干渉なくして各社會の資本は、自然に全社會の利益に最も好都合なる割合に出來る丈け近く分割せられて、一切の産業に分布する。資本

投下の自然的順序、資本の自然的流動の斯くの如き望まじき結果は一つに『見えざる手』の指導する所である。⁽⁹⁾かくて資本の投下、轉向の自然的傾向は一國の一切の産業間に自然的平衡を生ぜしむ。斯くの如き産業の自然的平衡の存する場合は經濟社會の最も健全なる状態であつて、其は宛かも人體の健全に比せらるべきものである。⁽¹⁰⁾茲に至つてスミスは國民經濟の有機的考察に到達してゐる。而して一有機體としての一國經濟社會の健全なる發達の原動力は各人の自利の自由にして安全なる追及是れである。

富の生産増進に伴ふ經濟社會の發達に關するスミスの自然觀は凡そ右の如くである。

- (1) G. Briefs, Untersuchungen zur klassischen Nationalökonomie, 1915, S. 213.
- C. Leslie, Essays in Political and Moral Philosophy, 2nd. ed, 1888, p. 34-35.
- Hasbach, Untersuchungen, S. 339, 331, 406, 408.
- (2) Ingram, History of Political Economy, 1919, p. 104.
- C. Leslie, Essays, p. 25, 27.
- Zeyss, A. Smith, S. 110-111.
- (3) Smith, Theory, P. 126.
- (4) Ibid. p. 110.
- (5) Ibid. p. 235.
- (6) Gide & Rist, A History of Economic Doctrines, p. 68.
- (7) W. of N. Vol. II. p. 43.

⁽⁹⁾ スミスは國富論並に道徳情操論に於て自利心を言ふ場合に種々なる語法を用ひてゐる。例之、自愛心、自利心、私利心、自己の生活状態を改善せんとする各人の自然的努力、又他人に關する事よりも自己に關することに深く配慮する、等是れである。尙ほ自利心に關しては後節参照せられ度し。

- (8) W. of N. Vol. I. p. 15.
- (9) Ibid. p. 16.
- (10) Ibid. p. 17.
- (11) Ibid. p. 323.
- (12) Ibid. pp. 323-325.
- (13) Ibid. p. 419.
- (14) Ibid. p. 419.
- (15) Ibid. p. 354.
- (16) Ibid. Bk. III. Ch. I.
- (17) Ibid. p. 359.
- (18) Vol. I. pp. 419-421, Vol. II. pp. 127-129.
- (19) Vol. II. pp. 105-106. 産業の自然的平衡の考へは既に講義中に表はれてゐる。Lectures, pp. 180-181.

五

前節に述べたるスミスの自然觀と彼が『見えざる手』の指導に對する深き信頼とは、彼を驅つて専ら Mercantilism の人爲政策を辛辣に攻撃せしめ、而して他面、經濟政策上の『完全なる自由と正義との自然的制度』を擁護せしむるに至れるは洵に當然のことである。蓋し人爲政策は却つて各人が自由に且つ安全に自利心の命ずる所に従つて行動することを妨げ、其の然らざる場合に生ずべかり

し一國社會の産業の自然的平衡、自然の秩序を破壊し、資本を一部産業に集積せしめ、經濟社會を爲めに不健全にして最も危険なる不秩序の状態に導くが故である。『かくて特典か或は拘束の一切の制度が完全に取除かるゝならば、明瞭にして簡單なる自然的自由の制度が自ら打ち建てらる。各人は正義の法を犯さざる限り、自己の欲するまゝに自家の利益を追及し、其の勤勞と資本とを以て他人若しくは他の國體の人々の其れと競争する爲めに完全に放任せられる。主權者は、彼が之れを行はんとするに當つては常に幾多の欺惑に陥るに相違なく、且つ如何なる人間の智慧又は知識を以てするも到底之れを適當に行ふには不充分なるべき任務から、即ち私人の産業を監督し、之れを指導して社會の利益に最もよく適合する諸事業に向はしめると云ふ任務から、全く免れる。』⁽⁹⁾

スミスが、經濟政策の唯一の理想は自然的自由の制度にある。従つて富國策の系統的樹立を思ふ國富論の唯一の結論は經濟政策上の自由主義、所謂自由放任論の一つに盡くるものと云ふべきである。自由放任論其れ自體は積極的主張であるが、其の内容が人爲の政策一切を排撃する消極策に過ぎざるは、彼に特有なる樂天觀が其の基調を爲せるが故である。

自利追及の完全なる自由を辯護するスミスは、一面に於て自利の追及を目して適正であると做し(後出)、而して他面其の自由の妨害を目して常に『不正』であるのみならず又『無禮』であると云ひ、『人類の最も神聖なる権利の明白なる浸害』であると謂ふ。乍然、彼の云ふ自由は如何なる場合に於ても絶體無制限なる自由ではない。彼が國富論中屢々自利追及の自由を云ふ場合に、『自由と安全とを以て』、『自由と正義』、『各人が正義の法を犯さざる限り』、『完全に自由に』と謂ひ、更に『彼が其の

隣人を害することなしに適當なりと考ふる方法に於て』と謂ふに徴して是れを見れば、其處には明かに『正義』の限界が存してゐる。既に其の道德情操論中に論ずる所に従へば、『富、名譽、昇進を得んと競争するに當つて、彼は其の競争者の總てを超越さんが爲めに、出来るだけ熱心に走り、神經と筋肉とを一切緊張するも宜し。乍然、若し萬一彼が競争者中何人かを突き又押し倒すならば、傍觀者は寛容なる態度に出でない。其れは傍觀者の許し得ざる公平なる勝負の侵害である。』⁽¹⁰⁾而して彼は謂ふ。『正義は……(社會の)全堂宇を支へる大黒柱である。若し此れが取拂はるゝならば、人間社會の宏大なる建築は瞬間にして微塵に粉碎するに相違ない。此の建築を建造し、此れを支持するは、此の世に於ては……特に自然が果敢なる意を用ひ來たりし所であると考へらる』⁽¹¹⁾。かくて各人が完全に自由に自家の利益を追及することは素より神の意圖する所である。然かも神は特に人間の社會を幸福、平穩に維持せんが爲めに正義の法を維持してゐる。自由と正義とは共に、かくしてスミスに在つては、神の意圖に歸せられてゐるのを觀る。

スミスが自利の追及を是認せる根據は素より其の形而上學的目的論に存する。『各人は疑もなく自然に依つて先づ主として自らのことに關心するを可とせらる。而して各人は他人を配慮するよりも自己を配慮するに一層適してゐるが故に、斯くすることは適正である。従つて各人は他人に關することよりも何事も自己に直接關する事柄に遙かに深く配慮する』。『各個人が自家の利益を最も能く判斷し得るものであると云ふ反面に於て、スミスは屢々政治家や立法者若しくは國家の主權者が各人の爲めに計らんとするも、彼等は到底他人の利益を充分に判斷し考慮することは不可能であると

教へてゐる。若し人爲干渉にして行はるゝならば、其は諸の弊害を伴ふのみならず、又確かに「富と繁榮に向ふ一國民の自然的進歩を遅からしむ」の夫故に又「法律は常に人民が彼等自らの利益を圖る様任し置くべきものである。蓋し 彼等は一般に立法者が爲し得るよりも一層善く判断し得るに相違ないが故である」。(10)

更にスミスが其の自然的自由の制度の下に於て認めたる自由は、社會の意識的機關の強制からの自由を意味し、而して各人の資本並に勞働に關する自由を意味する。(11)

却説、吾人はスミスの自由放任論の基調をなすものが彼に特有なる樂天觀であること指摘して置いた。而して彼の樂天觀は究極二箇の樂天的思想を包含するものであると考へ得る。一つは一國一社會の富の生産増大に關するものであつて、他は分配問題に關する樂天的思想である。即ち、各人が自由に安全に自家の利益を追及し得る場合には、各人は其の資本と勞働とを以て自ら知らずして一切産業に自然的平衡を生せしめ、有機體としての一國民經濟を健全なる状態に至らしむと云ふ樂天觀は前者に屬し、主として前節に述べたる彼の自然觀の反面をなしてゐる。然かも又右の自然觀は同時に、社會の一般的繁榮幸福が各個人の其れと一致し調和すると云ふ後者の樂天觀の一部をも包含してゐる。蓋し彼の樂天的考料に従へば、各人は自家の利益を判断するに最も適してゐるが故に、完全に自由に自利の追及を許さるゝならば、彼自らの利益を最も能く増進することを得べく、かくして一國一社會の利益も亦最大の限度に迄進めらるゝが故である。

吾人は既に富の生産増大に關するスミスの考案の一般を窺ひ得た。然らば彼の分配問題に關する

考案は如何。吾人は節を改めて先づ彼の理論的考察から是れを明かにし度いと思ふ。

- (1) W. of N. Vol. II. p. 107.
- (2) Ibid. p. 184.
- (3) Ibid. p. 32.
- (4) Ibid. p. 83.
- (5) Vol. I. p. 123.
- (6) Theory. p. 123.
- (7) Ibid. p. 125.
- (8) Ibid. p. 119.
- (9) W. of N. Vol. II. p. 172.
- (10) Ibid. p. 32.
- (11) 是等の點に關しては河上肇、資本主義經濟學の史的發展、一七七頁以後に詳し。

六

一國生産物の全體が社會の諸階級の人々に如何なる割合を以て分配せらるゝか。此の割合を決定するものは何であるか。斯くの如き問題はスミスが本來取扱はんとした所ではなくして、彼は「勞働の生産物が社會の諸階級並に様々の境遇の人々の間に自然に分配せらるゝ順序」を明かならしめんとした。乍然、事實彼の分配論は價格論から導かれたる社會諸階級の所得論たるに過ぎない。即ち彼は價格を分析して賃銀、利潤及び地代の三構成要素を得たる後、一國の生産物の全體も亦是等三部

分に分たれ、各々労働者、資本家及び地主の所得をなすと做し、而して各別箇に是等三種の所得の高低を論じてゐる。

『各國の土地及び労働の年々の生産物の全體、或は是れと同一事となる、此の年々の生産物の全價格は、…自然に三部分、即ち土地の地代、労働の賃銀及び資本の利潤に分かたれ、而して異なる三階級の人々、即ち地代に依つて生活する者、賃銀に依つて生活する者、及び利潤に依つて生活する者に對する所得を構成する。是等の者は各文明社會の根本的にして構成的なる三大階級にして、總有る他の階級の所得は究極是等階級の所得より得られる』⁽¹⁾

賃銀の高低に關するスミスの見解に従へば、賃銀の最低限度を畫するものは生存費であつて、然かも労働者に對する需要の増大しつゝある時には賃銀は右の最低限度以上にあるを普通とする。而して賃銀生活者に對する需要は單に賃銀基金の増加に比例してのみ増大する。此の基金に二種あり一つは餘剰所得にして、他は餘剰資本である。地主、年金收得者又は資産家が其の家族を維持するに足ると考ふる以上の所得を有する時は、彼等は此の餘剰の全部或は一部を以て一人乃至數人の僕婢を雇傭する。此の餘剰の増加は自然彼等をして其の僕婢の數を増さしめるに至る。更に獨立手工業者の場合に就て見るに、其の必要とする材料を購入し、且つ其の製作品を賣却する迄自己の生活を維持するに足る以上の資本を獲得したる場合には、彼は此の餘剰を以て一人乃至數人の職人を雇傭し其の労働に依つて利潤を得んとするに至るは自然の結果である。又此の餘剰を増せば、自然彼は一層多くの職人を雇傭するに至るであらう。夫故に賃銀生活者に對する需要は各國の所得及び資本

本の増加と共に増大し、此の所得及び資本の増加なくしては全然不可能である。而して右の所得及び資本の増加は即ち國富の増加に伴ふ。従つて賃銀生活者に對する需要は國富の増加と共に自然に増大し、國富の増加なくしては全然増大すること不可能である。⁽²⁾ 洵に『労働の報酬の大なるは國富増進の必然的結果であり、又其の自然的徴候である。反之、労働貧民の生活維持の資が窮乏せるは其の社會の靜止的狀態にあるの自然的徴候であり、労働者が飢餓の状態にあるは其の社會の速かに退歩しつゝある自然的徴候である』⁽³⁾ 従つて國民の大部分を成す賃銀生活者の生活状態が最も幸福にして安易なるは進歩的社會状態に於てである。⁽⁴⁾

『資本利潤の騰落は労働賃銀の騰落と同一の原因、即ち社會の富の増減状態如何に由る。乍然、此の原因が兩者に及ぼす影響は甚だ異なる。』資本の増加は賃銀を騰貴せしむるが、利潤を低落せしむる傾きを有つ。多數の富める商人の資本が同一事業に投下せらるる時は彼等相互の競争は自然資本利潤を低落せしむる傾き有り、同一社會に於ける總有る種類の事業に同様の資本増加ある場合には、同じ競争が總て同一の結果を生むに相違ない。⁽⁵⁾ 乍然、社會の資本の減少又は産業労働の維持の基金の減少は、賃銀を低落せしむると共に資本利潤を騰貴せしめ又利子を上騰せしむ。賃銀低下の爲めに、依然社會に残存せる資本の所有者は従前に比して一層低廉なる費用を以て其の貨物を市場に齎すことが出来、且つ市場に此の貨物を供給する爲めに投下せらるる資本尠少なるが故に、彼等は従前に比して一層高價に之れを賣却し得る。彼等は其の貨物に費す所従前に比して尠く、然かも多くを得する。従つて彼等の利潤は兩面より増加する。⁽⁶⁾ 既に賃銀基金に關してスミスの述べたるが如

く、資本の増加は國富の増進に伴ひ、従つて進歩的社會状態にあつては勞働に對する需要の大なるは賃銀を高め、資本の供給大なるは利潤を低下せしむる傾きあり、彼が實際觀察と其の分析の結果到達せる此の結論は正に注目すべきである。又同様にして國富衰退状態の社會にあつては勞働に對する需要少く資本の供給少きが故に、賃銀低く利潤高し、富の程度高くして靜止状態にある社會に於ては勞働資本共に供給過剰なるが故に賃銀利潤共に低し。¹⁰⁾

地代は借地人に普通利潤を支拂ふに必要な額以上に超ゆる生産物を以て成る。即ち借地人は其の生産物中、種子、勞働者に支拂ふべき賃銀、家畜其の他の農耕要具を購入維持する資本、並に其の地方に於ける農業資本の普通利潤を得るに足る是等總てのものを差し引ける殘部を地代として地主に支拂ふ。此の地代は借地人が其の土地の實際状態に於て地主に支拂ひ得る最高の地代である。¹¹⁾而して地代の高低は需要の如何に基く。土地の生産物中其の通常價格が、是れを市場に搬出賣却するに必要な額を以て回収し得るに足る以上に超ゆる所は、即ち其の價格の餘剩部分は當然地代となる。此の價格の餘剩部分の大小は需要の大小に依つて決せられ、而して地代の大小を決定する。¹²⁾而して需要は社會の進歩發達に伴つて増大する。従つて社會状態の改善は總て直接或は間接に土地の眞實地代を昂げ、地主の眞實の富を増す傾きを有つ。即ち土地改良及び耕作の擴張は地代を直接に昂ぐる傾きがある。蓋し土地の生産物中地主に歸する分前は其の生産物の増加と共に必然増加するが故である。製造品の眞實價格を直接低下せしむる傾きある勞働生産力の増進は、間接に土地の眞實地代を昂げる傾きがある。地主は彼自身の消費に剩る部分の原生産物を

を以て製造品を購入する。夫故に製造品の眞實價格を低下せしむるものは總て原生産物の眞實價格を騰貴せしめ、原生産物の一定量は従前に比して製造品の一層大なる分量と等價となり、地主は之れが爲めに従前よりも一層大なる量の生活消費品を購入し得る。社會の眞の富の増加、有用勞働の増加は總て土地の眞實の地代を間接に昂げる傾きがある。蓋し有用勞働中の一部は自然土地に向けられ、多數の人畜が土地耕作に用ひらるゝが故に、生産物は其の投下資本量の増加と共に増加し、地代は生産物と共に増加する。是等に反對の事情は各々地代を低下する傾きがある。¹³⁾

要之、各國の土地及び勞働の年々の生産物の全體は分れて賃銀、利潤、地代として各文明社會を構成する勞働者、資本家、地主の三大階級の所得をなす。而して右の三大階級中地主並に勞働者の利益は社會の進歩的状态と密接に關聯し、利潤收得階級、スミスに依れば即ち商人と親方製造業者の利益は前二者と反對の趨勢にあり、且つ社會の一般的利益の増進と調和せず、否反對に利潤率は其の性質上自然に富國に於て低く、貧國に於て高く、而して最も速かに亡び行く國に於ては常に最も高い。¹⁴⁾

今斯くの如き分配論の結論を念頭に置いて、進歩的状态に於ける一國の繁榮、富の増進を期待せるスミスの富國策を顧慮すれば、彼の主張する所は社會の大部分を構成する勞働者並に地主の一般的利益と合致するも、利潤に依つて生活する者の利益とは、其の利潤に關する限り、相容れざること明白である。然かも尙ほ彼の見解に従へば、單にある他の階級の市民の利益を増進せんとする目的の爲めに、ある程度迄一階級の市民の利益を害することは、明かに君主が其の臣民の一切諸階級

に對して負ふ公正、平等の取扱ひに反するものである。』⁽¹⁰⁾而して又彼の理想とする自然的自由の制度の下に於ては、各人の利益は社會一般の利益と一致し、調和すると考へられてゐる。果して然らば彼の主張する所は一問題に對して二箇の難點を包藏するもの、如くである。即ち一つは公正平等の取扱ひに關し、他は分配理論と樂天觀の不一致に關する。然かも前者に對する彼の一應の回答は『消費は一切生産の唯一の目的であり、而して生産者の利益は、唯だ其れが消費者の利益を助長するに必要な限りに於てのみ留意せらるべきものである。此の準則たるや全然自明の事たるが故に、是れを證せんと試みることは無稽である。』⁽¹¹⁾一切の工業の終極の目的は消費にある(既出)と謂ふに存すと見て誤なきもの、如くである。乍然、尙ほ彼が自然的自由の制度の下に有したる私益即ち公益なる樂天觀と、其の分配理論の結果とは互に相矛盾するの嫌なきを得ないであらう。

- (1) W. of N. Vol. I. p. 248.
- (2) Ibid. pp. 69 ff.
- (3) Ibid. p. 75.
- (4) Ibid. p. 83.
- (5) Ibid. p. 89.
- (6) Ibid. pp. 95-96.
- (7) Ibid. p. 96.
- (8) Ibid. p. 145.

- (9) Ibid. p. 146.
- (10) Ibid. pp. 247-248.
- (11) Ibid. pp. 248-249.
- (12) Vol. II. p. 152.

七

既述の賃銀理論と、スミスが自ら社會の最貧階級なりと見做したる賃銀收得者の生活状態に關する彼の樂天觀とを合せ考ふることは、分配に關する彼の見解中最も興味ある事柄である。夙にスミスは其の道德情操論中に論じて謂ふ。

『眼は胃よりも大なりと云ふ俗諺は地主に關して最も能く確證せられた。彼の胃の受容力は限り無き彼の欲望と何等比例せず。而して彼の胃の受容れる所は最も卑賤なる農夫のそれと異らないであらう。其の殘餘は之れを彼は、彼自ら消費する僅かな(食物)を最も精巧に調理する人々、此の僅かなものが消費せらるべき宮殿を準備する人々、高貴のものゝ家庭に用ひらるゝ種々なる裝飾品の總てを供給し整理する人々に分配するの外なく、かくして總て是等の人々は彼の奢侈我儘から、彼の慈悲や正義に訴へては徒勞たるべき所の生活必需品の分前を得る。土地の生産物は常に殆んど其れが維持し得る人口數を維持する。富者は其の堆積せられたる物の中最も貴重にして心持ち好き物を選択するに過ぎない。彼等の消費する所は貧者に比して多からず、彼等は性來利己的であり貪慾であるに拘らず、又彼等は唯だ自己の便宜のみを思ひ、彼等が使用する多數の者の總ての勞働より欲す

る唯一の目的は彼等自身の虚榮心と飽くことなき欲望の満足とであるとは云へ、彼等は其の改良の總ての生産物を貧民と分つ。彼等は見えざる手に導かれて、若し土地が其の總ての住民に平等に分割せられてゐるならば、爲されたであらうと殆んど同一の生活必需品の分配を爲し、かくて彼等は其れを意圖することなく、又知ることなくして社會の利益を進め、人類増殖の手段を供する。神は土地を小數の地主に分割するに當つて、其の分配に漏れたるが如く見える人々を決して忘れ見棄てたのではない。此等の人々も亦土地の生産する總ての物の分配に與かる。人生の眞の幸福を構成するものに於て、彼等は何れの點に於ても遙か彼等以上に見える人々よりも劣つてゐない。身體の安易心の平和に於ては種々の階級の人々が總て殆んど同一平準に在り、大道の側に日向曝しをしてゐる乞食は、國王が是れを得んと争ふ所の安全を所有してゐる。』(一〇)。

又別の箇處に於て謂ふ。

『最も卑賤なる労働者の賃銀でさへ自然の必需品を供給し得る。吾人は、其の賃銀が彼に食物と衣服と、一家屋並に一家族の慰安とを給するを見る。若し吾人にして彼の經濟を嚴正に吟味するならば、吾人の餘剰なりと見做し得べき其の賃銀の多大の部分を、彼が便宜品に費し、而して特別の場合にあつては彼は虚榮心と榮譽心の爲めにさへあるものを費すことあるを知るであらう。』(一一)。

スミスにあつては社會階級間の貧富の差は到底問題になり得ない。かくの如き樂天觀は又國富論中に之れを發見することが出来る。即ち曰ふ。

『繁榮しつゝある文明國民の間にあつては……多數の人々は一切労働せず、其の多くのものは働

くものの大部分に比し十倍百倍大の労働生産物を消費するけれども、然かも其の社會の全労働の生産物は頗る大なるが故に、總ての人は往々豊富に供給せらるゝことあり、最下級最貧階級の労働者でさへ、若し自ら節約勤勉ならば如何なる蠻人の獲得し得るよりも一層大なる生活必需品並に便宜品の分前を享受し得る。』(一二)。

『施政善しき社會に於て、最下級の國民に迄も擴がれる一般の富裕を來すは、分業の結果一切諸業の生産の大なる増加である。各労働者は自己の必要とする所以上に處分し得る多量の自らの労働所産を有して居り、他の労働者も各々正しく是れと同一の状態にあつて、彼は多量の自己の財貨を多量の他人の財貨と交換し得る。彼は彼等に其の必要とするものを豊富に供給し、而して彼等は彼に其の必要とするものを同じく充分に供給する。かくて豊富なる物資が一般に其の社會の諸階級の總てを通じて弘まる。』(一三)。

『實に高貴者の遙かに法外なる贅澤に比すれば、最も卑賤なるものの用立てる所は確かに至極單純簡易に見えるに相違ない。然かも歐洲の王侯の調度は、勤勉節約なる農夫の調度が幾千の裸體蠻人の生命と自由との絶對支配者たる幾多のアフリカ國王のそれに優る程、必ずしも農夫のそれに優るものに非るは恐らく眞實であらう。』(一四)。

『國民中其の大多數をなす労働貧民の生活状態が最も幸福にして最も安易に見えるのは、社會が既に其の富の全量を獲得し了へた時よりも、寧ろ更に富を獲得せんとして進歩しつゝある間の進歩的状态に於てあることは恐らく注目し得る。労働貧民の生活状態は靜止状態に於ては忍び難く、

衰微し行く状態に於ては悲惨なるものである。進歩的状态こそ事實社會の一切諸階級にとつて陽氣にして強健なる状態である。静止状態は緩慢なる状態であり、衰微し行く状態は憂鬱なる状態である」のこ

今是等の諸言を通じて観るに、スミスが社會の最貧階級と見做したる労働者の生活状態に關して抱懷したる樂天的考料は恐らく次ぎの如くなるであらう。

分業が發達し、而して社會が富の獲得に於て進歩的状态にある場合には、一方労働の生産物は豊富となり、財貨の豊富なるは價格の低廉を來す。或は分業に依る労働生産力の増大の結果、假令貨幣銀を同一なりとするも、同一労働量は従前に比して事實高價となり、一層多量の財貨を以て支拂はるゝの結果に至る。而して他方スミスの理論に於ては、社會が進歩的状态にある場合には、労働賃銀は高騰する。従つて斯くの如き状態に於ては労働者階級は一般に生活必需品の充分なる供給を享くるのみならず、尙ほ其れ以上の餘剰を以て安易なる生活を營むを得べき筈である。

吾人はスミスの斯くの如き樂天的考察に對比して、其のグラスゴウ大學に於ける講義中左の如き諸言を引用し得るであらう。即ち、

『労働が斯く分割せられ、一人の爲す所従前に比して甚だ大なる場合には、彼等の生活維持に必要ななる以上の餘剰は著しく大にして、各人は其れを以て、若し彼が一人にて其れを完成したりとすれば、彼が爲し得たるべきものの四倍と交換し得る。かくて貨物は遙かに低廉となり労働は一層高價となる。……社會の富裕なるは唯だ少量の労働が、能く夥多の貨物を享得し得る時のみである』。

「……貨物の市場價格を其の自然價格以上に高めんとする傾きある政策は、何れも公衆の富裕を減少する傾きがある。高價と稀少とは實際同一事である。貨物が豊富に存する時は、貨物は此れを得んが爲めに比較的僅かなものを提供し得る下層階級民に賣却せられ得るが、若し貨物にして稀少ならば然らず。夫故に財貨が社會にとつて一つの便宜である限り、單に小數者のみが、其れを所有し得る場合は社會の生活は幸福の度を減ずる。従つて財貨を永久に其の自然價格以上に保つものは何れも國民の富裕を減ずるものである。』

然らば、スミスが一般に分配問題に關して有したる樂天觀が、總て完全に彼自らの爲したる現實觀察に依つて矛盾なく支持し得られたであらうか。形而上學的目的論と經驗的認識との二重性を有する國富論は、遂に矛盾難點を止むることなしと觀せらるゝであらうか。吾人は茲に至つて明かに其の否定的論斷に到達せざるを得ない。

- (1) Theory, pp. 264-265.
- (2) Ibid. p. 70.
- (3) W. of N. Vol. I. p. 2.
- (4) Ibid. pp. 12-13.
- (5) Ibid. p. 14.
- (6) Ibid. p. 83.
- (7) Lectures, pp. 164-165; pp. 178-179.

八

自然的自由の制度に於てスミスは各人の自由なる自利追及と其の自由競争とを認め、而して其の結果に對しては各人の利益と社會一般の利益とが調和することを信じ、更に『進歩的狀態こそ事實社會の一切諸階級にとつて陽氣にして強健なる状態である』と樂觀した。乍然他面に於て彼が現實經驗の廣汎なる洞察は必ずしも社會一般の繁榮幸福と其の陽氣にして強健なる状態のみを示さずして却つて其の陰慘なる一面を示してゐる。即ち彼は多くの箇處に於て労働者と資本家、地主と商人、生産者と消費者、買手と賣手との利益の矛盾し、相反撥するものなることを謂ふの例へば、

『吾國の商人達は英國の労働賃銀の高きを以て、外國市場に於て彼等の製造品よりも他國人が安く賣る原因であるとして屢々苦情を訴へる。乍然、彼等は資本利潤の高いことに就ては口外せぬ。彼等は他の人々の法外なる利得に就て不平を鳴らす、彼等自身の利得に就ては何事も云ない。』

『労働の通常賃銀なるものは何處に於ても兩當事者間に通例爲される契約による。彼等の利害は決して同一ではない。労働者は能ふ限り多くを得んことを望み、雇主は及ぶ限り少く與へんことを望む。前者は労働の賃銀を高めんが爲めに、後者は是れを下げんが爲めに團結せんとする傾きがある。』而して雇主の數は遙かに小數なるが故に容易に團結することが出来、且つ彼等は假令一人の労働者を使用することなしとするも既得の資本を以て能く一二年間は生活し得る。然るに労働者中多くのものは失業のまゝ、一週間の生活に堪へ得ないであらう。同様にして彼等の内一ヶ月暮し得る者は極めて少く、一ヶ月の生活を支へ得る者は殆んどないであらう。故に兩者の爭議に於ては通常雇主が勝つに相違ない。』

地主並に資本家の『地代と利潤とは賃銀を食ひ減らし、是等二上層階級の人々は一下層階級を壓迫する』。

『吾國民自身が培養し、若しくは製造したる貨物と競争し得る一切の外國貨物の輸入を禁止すれば、國內消費者の利益は明かに生産者の利益の爲めに犠牲となる。』

スミスが自ら爲したる是等の諸觀察は、分配問題に關する前述の彼の樂天觀を破綻に導く因を爲すものである。此の故に彼を辯護するものは、例へば *Rise* の如き、彼の樂天觀を以て絶対的のものに非ず、又一般的のものに非ずとなし、其の樂天觀は單に生産の範圍にのみ限られ、スミス自ら是れを分配の範圍に迄及ぼすの意圖なかりしものである。蓋し『事實彼は斯くの如き觀念を抱懐するに餘りに思想健全である。』と謂ふ。而して又 *Rise* は評して謂ふ。『スミスの樂天觀は十八世紀の、自然の恩恵に對する餘りに粗朴なる信頼に依つて促されたる回想に過ぎず、又論理的證明の結論と云はんよりは寧ろ深遠なる確信の表明に過ぎず。』

乍然、吾人は *Rise* と共にスミスの樂天觀を其の分配問題の考察から驅逐せんよりは、寧ろ此れあるが故に。スミスは其の富國策の考察中にあつて遂に深く分配問題を考究することなくして終り、其の樂天觀と現實觀察との乖離さへ彼の疑念を惹くことなくして過ぎたりと推測するを以て妥當なりと考へる。地主の奢侈なるに拘らず、尙ほ『土地の生産物は常に殆んど其れが維持し得る人口數を維持する』と謂へる分配に關する、道德情操論中の粗朴なる樂天的思想は、前述の如く、國富論に於ても尙ほ強き反映を止めてゐる。斯くの如き樂天觀の必然の結果はスミスをして主として生産問題

を重視せしめ、分配問題の考究を輕視せしめたる所以であらう。而して個人の利益と社會の利益の調和を信じ、社會の一切諸階級の陽氣なる状態を確信して疑はず、然かもよく現實觀察が其の然らざることを示めせるに拘らず此れに疑念を挟むことなかりしは、創造神の意圖に深く信頼したる彼にあつては素より當然の歸結であると観るべきである。經驗的認識は未だ彼にあつて寧ろ積極的意義を持ち得るものである。

ネミスの樂天觀と其の經驗的認識との乖離は彼の方法論上の見解に於ては正に右の如く解釋し得るであらう。乍然、吾人は一步を進めて彼の斯くの如き矛盾の意義を明かにし度いと思ふ。

ロバートの前掲の批評は大體に於て當つてゐる。ネミスの樂天觀は「自然の恩恵に對する餘りに粗朴なる信頼」に發し、寧ろ「深遠なる確信の表明」に過ぎざるが故に、其は總て周到なる客觀的觀察と論理的證明とに依つて破綻に歸せらるべきものである。而して此は他人に依つて行はるゝに先ち、既に彼自ら其の運命の道を開きしものである。然かも彼が此の運命を悟ることなくして、其の樂天觀を基調とする自然的自由の制度を理想としたるには自ら別箇の理由が存する。「ネミスは歴史を通じ又歐洲全土に於て、世の知れる人間の立法が個人の自由と財産とを保護する以上に出でゝゐる場合には何處に於ても、單に其の結果たる不秩序と困窮とを見たるに過ぎない。彼は總有る方面に於て到る處に國家の干渉に由來する貧困の存するを見た」而して斯くの如き觀察に基いて直ちに「總て富と繁榮との存する唯一の源泉が、勤勞に對する自然的動機と個人の自然的生産力とであり、而して彼は自然を其のまゝに放置する外何物も必要でなく、個人の利益と公益との間に完全なる調和

が存し、而して人類の自然の行爲は富の最大なる豊富を獲得する……との結論に飛躍したのである」の洵に國富論が『産業自由の福音書』として従前の Mercantilism の非を更め、且つ其の富國策が唯だ生産政策としては重大なる意義を有するものではあるが、乍然未だ分配問題に關しては然らず。國富論は漸く産業革命の間に公刊せられたるに過ぎない。然かも彼は自由競争の陰慘なる一面を全然看過したるに非ずして、産業革命の結果を彼は豫想し得なかつたのである。彼の時代は未だ彼をして其の形而上學を放棄せしむる程充分に發展してゐなつたのである。

Joybee の論ずる所に從へば、

『ネミスの時代に於てさへ暗黒面は存してゐたが、吾人は今や一層暗黒なる時代——國民が嘗つて經過したる如何なる時代にも劣らざる慘澹たる恐畏すべき時代に近づく。蓋し富の大なる増進と共に貧窮の恐るべき増加が看取せられたるが故に、慘澹にして恐畏すべきである。而して宏大なる規模の生産、自由競争の結果は諸階級の離間を速かならしめ、且つ生産者の大多數を墮落せしむるに至つた』。『國富論は産業革命の夕に公刊せられた。アダム・ネミスが James Watt と其のグラスゴウの工場で語りし時は、Watt が蒸氣機關の發明に依つて、アダム・ネミスが夢であり、Utopia であると思ふ見做したる、かの自由の實現を可能ならしめるであらうとは、彼は殆んど考へてゐなかつた』。『若しネミスにして自由競争を分析せんと試みたとすれば、彼自身の時代の諸状態の下に於てさへ、彼は彼の學說中に致命的欠點の存するを認知したであらう。即ち彼は、彼が確立せんと請ひし所が平等なる産業單位の自由競争であり、事實彼が確立せんと助力しつゝありし所が不平等なる産業單

位の自由競争でありしことを發見したであらう。⁽⁸⁾ Toybee の論鋒は稍々急激である。C. Leslie のスミスに對する評價は恐らくスミスを解するに最も正しいであらう。即ち謂ふ。

『アダム・スミスの時代に於て例外たりし産業世界の一状態は吾等自身の時代に於ける正常なる状態である。而して確かに彼の實證的學說からするも亦彼の現實生活に對する稠密なる注意からするも、若し彼にして今六十年生き延びて居たならば、經濟世界の組織に關する彼の一般理論並に經濟生活に對する自由競争の結果は甚だ異なる性質を有してゐたであらう。』⁽⁹⁾

不幸にしてスミスの時代は、未だ彼をして經驗的認識の爲めに其の形而上學を放棄せしむるに充分でなかつた。彼は國富論に於て是等二つの異なる根基を有する二種の認識を統一的に綜合せんとする意圖を有せず。かくて屢々論ぜられたるが如く國富論が包藏する多くの矛盾は、スミスの右の如き不用意に起因する。⁽¹⁰⁾ 吾人が指摘したる彼の矛盾は、應て經驗が社會の調和を否定し、一切の形而上學を否定するの道を端なくも示してゐる。而して此の道は Malthus を經て Ricardo に至つて見事に開かれた。かくて彼等は最早やスミスの如く樂天的たるを得なかつたのである。國富論の根本思想は Ricardo に至つて完全に其の迹を斷たれたるを觀る。

- (1) Zeys, A. Smith, S. 99.
- (2) W. of N. Vol. II. p. 100.
- (3) Vol. I. p. 63-69.

- (4) Vol. II. p. 67.
- (5) Ibid. p. 159.
- (6) Gide & Rist, A History, pp. 92-93.
- (7) C. Leslie, Essays, pp. 34-35.
Leslie は尙ほ茲に、人類の自然の行爲が富の平等なる分配を來すを述べてゐるが、スミスは何處に於ても富の平等なる分配に就ては尋へてゐない。此のことは勞働者に關してスミスが有したる樂天觀に於てのみ明白である。
- (8) A. Toybee, Lectures on the Industrial Revolution of the Eighteenth Century in England, 6th. Impr. 1927, p. 64, 155, 154.
- (9) C. Leslie, Essays, p. 39.
- (10) Briefs, Untersuchungen, S. 214 ff.

— 昭和二年二月六日稿 —